

## 英国における利他性 (altruism)

— 医療・血液ドネーションを手がかりに —

香 戸 美智子

### 〈Summary〉

This brief research paper deals with altruism in Britain, with a special focus on blood donations in the middle of the 20<sup>th</sup> century. Richard Titmuss analyses such donations related to the human body not just in the medical context, but also in economic and socio-cultural contexts. He examines the British systems and incentives for donors, comparing them with American counterparts at that time, and attempts to analyse altruism as an integral factor in the welfare of the nation.

### はじめに

本研究ノートでは、戦後の英国における福祉国家を支えることにもなる福祉思想、特に利他性 (altruism) について、二十世紀中盤におけるティトマスを中心に考察する。特に彼の晩年の著は社会福祉理論と実証研究を統合させたもので、英国という国特有の利他性に焦点を当てており社会・文化論とも捉えられる。今日的課題でもある医療上の人体ドネーションにまつわる先駆的視点やボランティアに関わる視点も含む。著書<sup>1)</sup>に関連していくつかの論点から考察し、彼が英国における利他性についてその時代の輸血組織を通して如何に捉えていたかを検討する。

リチャード・ティトマス (Richard Titmuss, 1907-1973) は、英国の社会福祉および社会政策の研究者、教育者である。1940年代以降、英国が福祉国家を構築してゆく時代に、ウェップやベヴァリッジなどと共に多大な影響を与えた人物の一人でもある。1907年、ウェールズ・ベッドフォードシャーの小農家の家に生まれ、第一次世界大戦の影響下ロンドン郊外へ家族で引っ越すが貧しく、14歳で学業を終え、父親の死後は18歳でカウンティ火災保険会社に再就職し一家を支える。後にケイ・ミラーとの結婚を経て、K. ハンコック博士との出会いにより保健省の戦時史・諸政策研究職に就き、次第に研究を深めてゆく。1950年以降はロンドン大学 LSE 教授を務めるが、アカデミズムでは珍しく十分な正規の教育を受けていない努力の人でもあった。招かれたロンドン大学ではソーシャル・アドミニストレーションの講座を担当し、当時の社会科学部内で学科としての発展に寄与した。不安定な学問域であったものを体系化し科学的に発展させ、学問としての社会政策 (ソーシャル・ポリシー) の確立に努めた。ウェップやベヴァリッジと同様に、アメリカの当時のフリードマンなどに代表される貧困の烙印を押すことにもなり得る選別

主義に対し、普遍主義の立場から福祉国家に関する議論を展開した。単なる経済的貧困や所得の問題だけでなく、社会性、市民的権利や不平等の問題などの観点からも論じる。中後年には英国の福祉国家の諸制度への寄与だけでなく海外においても認められ、カナダやアメリカ、イスラエル、国際機関等から招聘され講演や助言など多大な貢献も行っている<sup>2)</sup>。

## 1. ギフト (gift) 概念について

ティトマスは、晩年の1970年に自らの社会福祉・社会政策理論を実証研究と統合させ、『贈与関係論』(*Gift Relationships — from human blood to social policy*)を著した。これは、贈与 (gift) という人類学での概念を援用し、現代社会における医療上のドネーション、特に輸血サービス組織について分析したものである。また1968年『社会福祉へのコミットメント』(*Commitment To Welfare*) (第三部) においても論じている。

ここではまず、上記著作において大きな影響を与えたとされるモースを中心としたマリノフスキーなど人類学分野からの研究について、ティトマスの贈与概念の前提として確認する。

マルセル・モース (Marcel Mauss, 1872-1950) は、師であり叔父であった社会学者デュルケームが第一次世界大戦末期に没した後の1923-24年に「贈与論」(*Essai sur le don*)を論じた。当時の北部アメリカ先住民や太平洋諸島などアルカイックな社会における贈与・交換の制度を分析したものである。同じ人類学者のマリノフスキーは南太平洋諸島 (トロブリアンド諸島) におけるクラ交易について経済制度としての贈与を論じていた (1922)。諸島ではクラ (kula) という部族間 (諸島間) の儀礼を伴う贈与交換制度があり、首飾りと腕輪という財を受け取るために航海し、それぞれ左回り・右回りで受け取りと贈与が繰り返され数年かけて諸島間を循環する。モースは、クラとともに北米先住民における同様の贈与交換制度であるポトラッチ (potlatch) をも取りあげ、アルカイックな社会のこのような現象から、単に経済だけでなく「全体性」を引き出し「全体的社会事象」(a total social fact)と呼んだ。つまり、「多様な」「動態」であり、「あらゆる種類の制度が、同時に、かつ一挙に、表出されている。それは、宗教的な…法的な…倫理的な制度である。…それはまた経済的な制度である。…さらに、これらの事情は審美的現象にも行き着くし、これらの制度は社会形態学的現象としてあらわれもする」<sup>3)</sup>。特に集団の贈与による財の交換の現象を「全体的給付の体系」とした。

モースによれば、贈与を構成するのは、与え・受け取り・お返しする (提供・受容・返礼) という三つの義務とされた構成物であり、それらの社会的交換行為により社会的連帯が強化される<sup>4)</sup>。

ティトマスは、上記の著作第八章でモースに言及し非経済的贈与の慣習と行動についての重要性を語り、文明化された現代社会の市場経済システムの中で我々が失ってしまったものとして位置づけている。

我々は歴史上の文明国の習慣の意味について考えるときはいつでも、以下のことを、思い出すべきである。すなわち、大規模経済システムにより、もし文明化されなければ得られたものを、如何に多く失ってしまったかということ。以前の場所では、財とサービスの交換は非人格的ではなく、むしろ倫理的な取引交換であった、そして、個々人や集団間の人間的な諸関係をもたらし維持していたのであった<sup>5)</sup>。

ティトマスはモース同様、北アメリカ先住民のポトラッチやメラネシアのクラなどにおける贈与という行為 (acts of giving) や交換の諸現象が、集団ひいては部族・社会における連帯を形成することを転じ、モースの著の最終章の結論部である現代西欧社会における社会保障の制度の到来に言及する。「贈与というテーマ…贈与における自由と義務、贈与における寛容さと利己性というテーマは長く忘れられていた圧倒的なモチーフの復活のように我々自身の社会において再現する。」<sup>6)</sup> すなわちティトマスは、現代における福祉国家制度、社会保障、NHS (国民医療保健サービス) そして輸血サービス組織の発展に関し、原点として上記の非産業化社会における贈与の諸現象を想起させたのである。その意味ではモースの贈与論を巧妙に自己の理論に取り込んだと言えるかもしれない。

アルカイックな社会の人類学的考察からモースの結論部で表されるのは、市場経済主義でもなく当時の革命的社会主義経済論でもないデュルケームのいう社会連帯、連帯主義思想に基づく国家における社会保険や社会保障、累進課税など当時のフランスやイギリスにおいて実現されつつあった社会立法へとつながる視点であった<sup>7)</sup>。ティトマスとモースは贈与と福祉国家という出発点と終点では同じように思われるが、ティトマスは献血という具体的契機を有することになる。

## 2. 医療ドネーション — 輸血サービス組織 —

二十世紀初めの血清学上の発見により輸血に関わる医学的技術は目覚ましく発展した。特に社会的視点から捉えると、1920年代初頭に英国では世界で初めてのボランティア組織が作られ、ロンドン内で病院とドナーとのネットワーク構築が進められた。当時は技術的にまだ長期保存血ではなく、患者・病院のニーズにより伝えられドナーが出向きボランティアとして献血する方式であった。その後、英国ではこの無償の血液ドネーションが継続して行われた。1930年代後半以降は第二次世界大戦に備え血液保存技術の向上、緊急医療サービスのもとロンドンでは四つの輸血サービス組織の拠点が設けられ血液の収集と保管・供給の役割を担った。この組織はすぐに全国規模へと拡大する。戦後は新たに1946年に全国輸血サービス組織 (National Blood Transfusion Service) となり業務を引き継ぐが、ティトマスの著でふれられているように、英国ではボランティアを基本として無償の血液提供が継続されており、献血数も戦後20年間にわたり着実に増加傾向 (1948~1968統計: 265%上昇) を示していた。これに対して、世界の多くの国々では1950年代~1960年代はまだ売血による血液供給が圧倒的であり、その筆頭に医療の市

場化を推進し売血による血液収集・輸血が一般的であった当時のアメリカがあった。また日本の売血の実態にもティトマスは言及しており、ライシャワー事件以前の時代であったことがわかる。

このような状況のもと、ティトマスは当時の英国と米国の輸血サービス組織に関連した実証研究を行う。半世紀以上も昔では医学上の治療は自然発生的生物学的対応の結果あるいは単なる偶然であったのに対し、今は「科学と技術と経済成長が、医療を一つの集団過程」すなわち、「広範な、専門的技能、技術、資源、制度などの組織的適用の問題」に変えたとする。つまり、医療概念を構成要素に分解するという考え方の必要性を唱える。一つの例として血液があげられ、治療医学の危機の構成要素として「人間そのものの血液の調達、加工保存、血液型の適合試験、配分、財政、輸血の問題」とされ、「一体、人間の血液は一個の消費財であろうか」という命題とともに、社会政策の理解のためこのような包括的な考え方の必要性を説く<sup>8)</sup>。

血液供給システムとして、英国では輸血サービス組織という（福祉）国家による全国規模の機関が一括して運営していたのに対し、アメリカでは各地域により種々様々でいくつかの独立した機関（官民）が担っていた。当時、ニューヨーク市は人口約 800 万人、年間約 33 万パイントの血液を使用、イングランドとウェールズの供血数（1965）は計約 130 万パイント、アメリカ全体での推計は年間約 600 万パイントの血液が集められるとしている。血液の提供について、英国の制度では伝統的にボランティアに無償で行われるのに対し、アメリカでは血液とドナーとの関係において商業化が進んでおり、英米両者の政策および制度がティトマスにより比較検討される。結論として、医療上の（人体）ドネーションについては、市場主義原理に基づき消費財として扱うというよりも、贈与という視点から捉え直し福祉の原理に基づく選択がより望ましいという主張である。

ティトマスの調査によると、例えばニューヨークの現状として、血液を扱う独立機関が 150 以上あり、いくつかは利潤目当てで、「多くの機関はいわゆる『職業的』売血者から血液を購入しているが、それにもかかわらず、急性かつ慢性的な血液不足が存在している」のである。アメリカの多くの都市では、「職業的」売血者の採血頻度が勧告基準より高く、また「売血者の 30 ないし 40% ほどは失業者や未熟練労働者」である<sup>9)</sup>。しかしながら、売血により予測される供給量の多さに反して、アメリカでは血液不足に陥る理由は、血液の質などの危険性の問題からであり、またそれが価格の高騰化にも繋がっていることがティトマスの研究により実証される。「ニューヨーク市やその他の市における血液不足は、一部は多量の血液浪費（病院などの機関による血液の買いだめによる）と、「職業的」売血者の血液の質に危険があるためである。その結果、患者に送られる血液の料金や輸血勘定書は高価なもの」となる。<sup>10)</sup> また「『職業的』売血者は、無償のボランティアのように誠実さをもって病歴を語ると期待することはできない。」<sup>11)</sup> ともしている。ティトマスは、英国とアメリカの組織比較を通し社会的市場と経済的市場を対比させる。米国の売血による血液・人体ドネーションは、結果として汚染された血液の存在や血液不足というだけでなく、対象が低所得者になることにより搾取の危険性をも示しており<sup>12)</sup>、医療の市場化、商業化に警鐘を鳴らす。すなわち、当時のアメリカの血液銀行システムおよび医療の市場化の限

界を示し、福祉政策において社会と経済を区別し社会的市場の概念を主張したのであった<sup>13)</sup>。

このような状況に対し、ティトマスによれば、英国では血液は「(すべてボランティアな献血計画によって) 無償の貴重な必需品 (a precious commodity . . . without price)」とされ、「もし、不注意に使われたり、あやまって用いられたりすると、血液は、多くの薬剤よりも致命的でありうる。伝染性の肝炎 (相同性血清肝炎) その他の病気のビールスを運ぶ危険性がある」ために、「供血者の選定や血液型の適合試験, 検査, 輸血などには、もっとも厳格な基準が定められている。」英国では血液不足はなく、「血液は、コミュニティによって、コミュニティのために、自由に献血される。」「血液は、所得, 階級, 人種, 宗教, 私的患者, 公的患者のいかんを問わず、健康な者から病人に与えられる『無償の贈物』 (a free gift) である」としている<sup>14)</sup>。

ティトマスの研究は当時世界的に大きな反響をもって迎えられた。特にアメリカへの影響は大きく、売血から献血への転換の大きな契機となる。1971年、『ニューヨークタイムズ・ブックレビュー』(12月5日付)ではその時代の七冊の最高の書物の一つに選ばれ、米議会(下院)でもその重要性が取り上げられ賞賛され血液銀行制度の改革への重要な役割を担うことになった<sup>15)</sup>。1972年3月にはニクソン大統領がティトマスにふれ、保健教育福祉省(DHEW/Department of Health, Education, and Welfare)に早急に安全で敏速な効率良い全国規模の血液収集と分配制度を構築する計画を促したことを発表した<sup>16)</sup>。一方、英国内でも福祉国家制度の一つであるNHS(National Health Service, 国民医療保健サービス)を擁護する基盤として賞賛された。フォンテーンも指摘するように、それ以前からの経済問題機構(IEA)(1955設立)との確執は続くが、アローなどの多くの経済学者からの活発な議論も相次いで展開された<sup>17)</sup>。1973年に後のサッチャリズムへの契機となるIEAに関わるハイエク(Friedrich von Hayek)がノーベル経済学賞を受賞するが、ティトマスの旧友であるミュルダール(Gunnar Myrdal)も同時受賞し、後の二つの支柱を象徴することになる。

その後の英国ではティトマスは一時忘れ去られるが、HIV/AIDSが1980年代を通し明らかになるにつれ再評価され始め、20世紀末より先進国で急速に進められている臓器移植の議論やボランティアの文脈でも取り上げられようになる。

### 3. 血液の贈与・ドナー (1)

次にティトマスが血液ドネーションを如何なる枠組みで捉えようとしていたのかを検討する。『贈与関係論』において一般的な贈与概念と比較し、血液の受容と供給についての特殊性、文化に普遍的な共通性として血液の贈与としての特徴(属性)を以下のように定義づける。

- a. 血液の贈与は、非人格的状況のもとで行われる、時折ドナーに対して身体的に痛みを伴う結果をもたらす。
- b. レシピエントは、ほとんど全ての場合、ドナーに個人的には知られない。したがって、感謝や他の感情の個人的な表現はあり得ない。
- c. 人口のある集団だ

けが贈与することを許される。贈与できる人々の選定は、外部の権威者による理性的なルールに基づき決定され、文化的ルールに基づくものではない。d. 贈与しないことに対して、個人的な、予測できる罰は全くない。悔恨、恥辱、罪悪感という社会的に強いられる制裁は全くない。e. 贈与者にとって、現在あるいは将来に、返礼されるという類似の贈与の確実性は全くない。f. 贈与者は、お返しとして類似の贈与を要求したりあるいは望むことはない。彼らは、自分が輸血を受けることを期待するものでも欲するものでもない。g. たいていの制度において、返礼として類似の贈与をするという義務は、レシピエント自身には全く課されない。h. 贈与自体が見知らぬ (unknown) レシピエントにとって有益であるのか有害であるのかは、ある程度、贈与者の誠実さと正直さに依存する (贈与者により自身について慎重に差し控えられたり或いは誤って伝えられる情報は、見知らぬ人 (stranger) にとり重大になるかもしれない)。さらに、媒介者——贈与を集め処理する人々——は、あるシステムにおいては、それが潜在的に有益であるもしくは有害であるかを決定するかもしれない。i. 贈与者とレシピエント双方は、もしもお互いに知っているとしても、宗教的、民族的、政治的、その他の理由により、過程への参加を拒否するかもしれない。j. 贈与としての血液は、非常に減れやすい (その価値は急速に減ずる)、しかし、贈与者もレシピエントもそれが使用されるのかあるいは廃棄されるのかを決定するどんな権力も行使しない。k. 贈与者にとって、贈与は、素速く自身の身体により回復される。永遠の喪失は全くない。受容者にとり、贈与はすべてになりうる。すなわち生命それ自体 (life itself) である<sup>18)</sup>。

このように共通項として血液贈与のユニークさを掲げる一方で、ドナーの動機へと議論を移し医療概念の構成要素から多様性を引き出す。ドナーの特徴ごとにA~Hの分類を行う。血液ドネーションは共通であっても、文化や医療制度・市場経済等により異なるタイプのドナーが現出する。したがって、A~Gは当時の多くの国々における市場媒体のドナーの制度であり、Hタイプは当時のNHS下の制度によるものである文化風土も勘案しなければならない。少し長いが当時の詳細が理解でき、以下掲げる<sup>19)</sup>。

Aタイプ：有償ドナー。市場で血液を売るドナー。当時のアメリカでは市場としての血液ドネーションが成立しており、「違法にラベルを貼り間違えたり日付更新したり…、スクリーニングやドナーとして薬物常習者、アルコール依存者、肝炎・マラリア・他の病気保持者を除外することは困難である。多くの中毒者は…検査時自らの中毒をうまく隠した。」B. 職業ドナー。職業的に血液贈与を行う。「定期的に、登録し、半恒常的に、あるいは半給与者」である。ドナーの大半は、アメリカの製薬会社や商業血液バンクにより運営されるプラズマフェレーゼ (血漿搬出) プログラムに週に1~2回提供する。C. 有償ボランティア・ドナー。このドナーは「現金支払いを受け取るが、自らは必ずしも主に支払いにより動機づけされたのではないと主張する。」コミュニティの血液ニーズを認識しており、職場やコミュニティでの集団的なプレッシャーによりドネーションを強いられたかもしれない。このタイプのドナーはボランティア行為

に対して支払われることを期待し、支払いは「利潤」あるいは「邪魔なお金」の一種として見なす。D. 責任料金ドナー。アメリカなどのプログラムで多く実施される。血液を受ける患者が責任・代替・デポジット保証という料金を課される。患者は、状況を受け入れるか血液を返すか他の人にボランティアの血液供給か現金支払いを頼む。料金が返済される。E. 家族クレジットドナー。毎年、血液を1パイント前もってドネーションし、お返しとして一年間、自分自身か家族（依存・未婚の19歳までの子供）が血液の必要性を「保証」される。F. 捕虜ボランティアドナー。拘束や従属する権威のもとにあるドナーで、ドネーションを求められたり要求されたり期待されたりする。拒否すると、恥辱にさらされたり将来に影響する。組織の権威や関連する社会集団による道徳的圧力は罰と褒美を伴う。褒美は金銭や非貨幣の特典、囚人には減刑など。主に軍隊や囚人が対象である。G. 特典ボランティアドナー。金銭の形でない有形の見返り（メダルや感謝状の他に）に魅せられ動機づけられてボランティアを行うドナー。一般的な特典は、有給休暇・休暇の延長、ドネーション後の無料の食事、鉄分・ビタミン剤、無料の医療ケア、医療相談や病院ケアの優先カード、無料の野球やサッカー券など。H. ボランティア・コミュニティ・ドナー。このタイプは社会的現実において「自由な人間的な贈与」(free human gift)の抽象的概念に最も近いものである。特徴は、金銭・非金銭形態の有形の即座の見返りの欠如、ペナルティの欠如、ドナー間で、自分たちのドネーションは匿名の見知らぬ人 (unnamed strangers) のためであり、年齢、性別、健康状態、収入、階層、宗教、民族集団の区別なしであるということを知っている。どのドナータイプも完全な自然発生的な利他性 (altruism) に特徴づけられるとは言えないが、英国におけるすべてのドナーと多くの他のヨーロッパ諸国の制度におけるドナーのタイプである。

このようなA~Hの類型化から血液ドナーの動機を含む多様性を示す。ティトマスによればそれは文化的道徳的価値観により決定され、血液の贈与の動機は異なる社会や異なる輸血組織形態により変容するのである。

#### 4. 血液の贈与・ドナー (2)

さらに当時の英国の実証研究としてティトマスは、1967年の夏と秋に保健省と全国輸血サービス組織の協力のもと、パイロットスタディとして約8,000人の献血者へのアンケート調査を行う。3,813人のドナーから回答を得る。対象は一般人 (GP, general public) 65%, 組織 (I, institutions, 工場・会社・学校) 32%, 国防省 (DS, Defence Services) 3%である。男性60%, 女性40%である。年齢：18-24：男性22%, 女性23%；25-29：男性14%, 女性12%；30-34：男性13%, 女性9%；35-39：男性13%, 女性11%；40-44：男性12%, 女性11%；45-49：男性12%, 女性11%；50-54：男性8%, 女性9%；55-59：男性6%, 女性8%；60-64：男性2% (65+1人), 女性5% (65+3人)。

利他性分析としてアンケート質問 (自由記述) 「なぜ、あなたが最初に血液ドナーになること

を決心したのかを教えてください。(Q. 'Could you say why you first decided to become a blood donor?')」を実施し結果をまとめたものが以下である<sup>20)</sup>。

利他性 (Altruism) 26.4%, 健康への感謝 (Gratitude for good health) 1.4%, 互酬性 (Reciprocity) 9.8%, 代理 (Replacement) 0.8%, 血液の必要性への意識 (Awareness of need for blood) 6.4%, 義務 (Duty) 3.5%, 戦争協力 (War effort) 6.7%, 1945年以降の国防 (The Defence Services after 1945) 5.0%, 稀少血液型 (Rare blood group) 1.1%, 何らかの利益を得るため (To obtain some benefit) 1.8%, 個人的アピール (Personal appeal) 13.2%, 一般のアピール (General appeal) 18.0%, その他 (Miscellaneous) 5%, 1つ以上の回答 (More than one type of answers) 0.9%。

すなわち、「全回答の2/5以上が、利他性、互酬性、代理、義務」のカテゴリに入り、「1/3近くが、個人的一般的な血液のアピールに自発的な反応」を示した。「これらの7カテゴリーは回答の約80%近く」であり、それは「社会の他の構成員のニーズに向けて社会的責任意識が高いこと」(a high sense of social responsibility towards the needs of other members of society)を示すものであり、ティトマスは「調査から現れた顕著な印象の一つ」と結んでいる<sup>21)</sup>。

## 5. 血液ドネーションと利他性

以上のように長年英国で継続されてきた輸血サービス組織の伝統をもってティトマスは英国の福祉国家における利他性を分析したと言える。彼は英国における血液ドネーションに関する利他性をどのように捉えていたのであろうか。血液ドネーションについて「創造的利他性」(creative altruism)と表現する<sup>22)</sup>。

まず、先述のドナー分類で示された英国におけるHタイプのドナーを「自由な人間的な贈与」(free human gift)としていることからわかるように、血液ドネーションは、「自由な意志でなされ、自己の選択からの行いであり、恥じることのない良心からのものである。」(They acts of free will; of the exercise of choice; of conscience without shame.)<sup>23)</sup>とする。また、他種の贈与交換では供給者と受容者がお互いを知っているが、血液ドネーションでは、完全な「見知らぬ人々 (strangers)」間でドネートされる。性別や年齢、人種・民族、信仰など全く知らされない。与える(奉仕する, act of giving)と言う行為は、明確な「返礼贈与 (return gift) への期待感や道徳的な強制」(expectation or moral enforcement of a return gift)<sup>24)</sup>をまったく伴わない。すなわち、「見知らぬ人のために、どんな金銭的あるいは道徳的なお返しをも期待しない (<altruistic, > destined for an unknown person and with no expectation of anything in return, no financial or moral reward.)」<sup>25)</sup> 自由意思に基づく利他心なのである。

しかしながらそれは、ティトマスによれば、完全な利他性ではない。先述のどのドナータイプも「完全な私心のない自然発生的な利他心という点から」特徴づけることはできないと言う (No donor type can be depicted in terms of complete, disinterested, spontaneous altruism.)<sup>26)</sup>。「あ



る種の義務感、賛同、興味の感覚があるに違いない。社会における『包括』(inclusion)の感情である。贈与(gift)のニーズと目的についての何らかの意識である。これらのドナーが今この場での見知らぬ人のための善と見なすことは、(彼らは言うか暗示するのだが)、不確定なある日に、彼ら自身のための善とも成り得るのである。<sup>27)</sup>それは部分的な利他性であり、アシュワースも示すように、「血液ドナーは、自分のドネーションが以前の利益への応答(返礼)、あるいは将来自身が必要になった時に返礼(互酬)されうる贈与、あるいは最も一般的には集団のメンバーの一部としてせざるを得ない何かであると感じ得る。」ことを指摘した<sup>28)</sup>。

つまり、ここに彼の利他性の中における集団・社会性を発見できる。ティトマスは、純粋な贈与(pure gift)や純粋な利他主義(pure altruism)ではなく、むしろ集団・社会と関連した利他心を提起する。本稿の2で考察したモースなどの人類学的知見であるアルカイックな社会における贈与交換による社会連帯の視点である。

「われわれが無償でコミュニティに対して何を貢献するかに関わるもの」<sup>29)</sup>であり、血液のボランティアなドネーションからコミュニティに関する利他性による統合を論じたと言える。

血液の贈与は、他人の生命の重要性とニーズを理解でき、血液をドネートすることを通して、リスペクト、「人体への尊厳と全く別の人間への尊厳」(respect for the human body and respect for another' entire being.)<sup>30)</sup>の気持ちを伝えるのである。これはドナーにより見知らぬ人(strangers)の健康や幸せ及びコミュニティへの義務感とも表現され社会的責任感とも捉えられる。

コミュニティや社会連帯に関しティトマスは市場主義との比較でも述べている。

個人として彼らは、自己愛の善を超えた、より偉大な善の創造に参加していると言えるかもしれない。彼らは自分自身を「愛する」ために、見知らぬ人々を「愛する」必要があることを認識していた。対照的に、ばらばらの個々人からなる私的な市場制度の機能の一つは、人を、相互交換できない他人への影響にもかかわらず、他人に対するどんな義務感からをも「解放(自由に)する」ことである、そして、(与えることができる)人を、(与えることができない)他人を排除するという犠牲のもと、社会における包括(inclusion)の感覚から、解き放つことである<sup>31)</sup>。

このような社会性の言及から社会政策へと議論が進められる。

社会が——特に医療や福祉制度において——その社会的諸機構を組織し構造化する様々な様式は人間における利他心を、より促進(encourage)できるのか、あるいは萎縮(discourage)させてしまうのかである。そのような諸制度は、統合(integration)を促進し得るか、あるいは疎外(alienation)を促し得るのかである<sup>32)</sup>。

すなわち、社会政策の役割および内容の如何により国民の利他心の振幅が規定されることを提起した。

ティトマスの主張する血液ドネーションにおける利他性とは、「創造的利他性 (creative altruism)」であり、それは社会やコミュニティにおける「見知らぬ他人に対する利他心 (altruistic toward strangers)」であり、社会的連帯の感情意識、時にそれは義務感や社会的責任感といった感情にも結び付く。それはデュルケームのいう有機的連帯に基づく社会 (societies based on organic solidarity)<sup>33)</sup> の特徴とも言えるであろう。

このように、モースなどの人類学におけるアルカイックな社会分析をヒントに、血液贈与という視点から現代社会における利他心の役割について論じたのであった<sup>34)</sup>。そして、『贈与関係論』後半第16章のタイトル「誰が私の見知らぬ人であろうか」(Who is my stranger?) から明らかかなように、それは、現代社会における家族や友人という限定されたコミュニティではなく、むしろ(遠く広い)コミュニティにおける見知らぬ人 (strangers)、普遍的な見知らぬ人々 (universal strangers) との諸関係を贈与を通して分析したものであった。

現代社会において、この「見知らぬ人への利他心」(altruistic toward strangers; relations among strangers)<sup>35)</sup> はどのように考えることが可能だろうか。興味深いことに、ティトマスは典型的な宗教性、キリスト教についてはまったく触れておらずむしろ社会的教育の必要性を説く。

すなわち「社会的責任感、…われわれにとって自然なものではない。だからこそ、育む必要性がある。そのことは、なぜ利他的な血液ドネーションが即座の医学的ニーズに役立つというだけでなく、それはまた社会の福祉を増幅させていくものであるのかという主な理由」<sup>36)</sup> なのである。

つまり、本来の利他心から、血液ドネーションによる社会的教育へと「支点」の転換が語られるのである。

## 註

- 1) Titmuss, Richard M. *The Gift Relationship: from Human Blood to Social Policy*, Allen and Unwin, 1970; Original edition with new chapters, edited by Ann Oakley and John Ashton, New Press, 1997.
- 2) 主要な著書に、1938年 *Poverty and Population*, 1943年 *Birth, Poverty and Wealth*, 1950年 *Problems and Social Policy*, 代表的な二論文掲載の1958年 *Essays on "the Welfare State"*, (1963, 1976). (ティトマス・谷昌恒邦訳『福祉国家の理想と現実』1967年), 1968年 *Commitment to Welfare*, Allen and Unwin (; 1976). (R. M. ティトマス・三浦文夫監訳『社会福祉と社会保障——新しい福祉をめざして』1971年) などがある。参考として三浦文夫, 1977年; 一圓光弥 1971年。
- 3) Mauss, Marcel. "Essai sur le don: forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques", *Annee sociologique*, N.S., tome 1, 1923-24, p. 30-186 (in Marcel Mauss, *Sociologie et anthropologie*, Paris: Presses Universitaire de France, 1950, p. 143-279). マルセル・モース/森山工訳『贈与論

- 他二篇』岩波書店, 2014年(吉田禎吾・江川純一訳『贈与論』筑摩書房2009年). p. 59, 60.
- 4) モース同書(第一章).
  - 5) Titmuss, *op.cit.*, p. 125.
  - 6) *Ibid.*, p. 126.
  - 7) モース 前掲書 p. 406, 407. 「このようにしてわたしたちは, アルカイックなものに, 基礎的な原理に, 部分的にであれ再び戻ることができる。また, 戻らなくてはならない。……すなわち, 公の場で物を与える喜びであり, 美的なものへ気前よく出費する喜びであり, 客人を欲待し, 私的・公的な祭宴を催す喜びなのである。社会保険にしる, 相互扶助組織や共同組合における他人への気遣いにしる, 職業団体や, イギリス法では『友愛組合 (Friendly Societies)』(病気の際や老齢になったときなどに金銭扶助を図るための共済組合) という美名が冠されている法人団体すべてにおける人への気遣いにしる, これらは, ……価値あるものである。」その他参考として佐久間寛, 2011年; 桜井英治, 2011年。
  - 8) Titmuss, Richard M. *Commitment to Welfare*, George Allen and Unwin Ltd. 1968. (R.M. ティトマス・三浦文夫監訳『社会福祉と社会保障——新しい福祉をめざして——』社会保障研究所/東京大学出版会, 1971. 第三部) p. 147 (p. 183).
  - 9) シカゴ市では1964年全供血者の60%が売血者であった。1956年「ニューヨーク市は, 血液供給の約42%まで『職業的』売血者に依存していた。1965年のその推定値は55%であった。」Titmuss, 1968, *op. cit.* p. 149-150 (p. 185-186) (以下三浦訳)
  - 10) *Ibid.*, p. 149 (p. 185).
  - 11) *Ibid.*, p. 150 (p. 186).
  - 12) Titmuss, [1970] 1997, *op.cit.*, p. 286: “(In these) expanding fields of human experimentation — as with plasmapheresis programs — virtually all the strangers who give, by inducement, for money or in captive situations, are poor people; the indigent, the deprived, the educationally handicapped, the socially inadequate (in and out of prisons and other institutions), and all those described by an American sociologist as ‘inept’ in advancing the hypothesis that modern economic systems ‘utilize the inept more efficiently.’” (この点について Keown, 1997 p. 98. キーウォンは搾取として議論している。)
  - 13) *Ibid.*, Chapter 15: Economic man: social man.
  - 14) Titmuss, 1968, *op.cit.* p. 148-150 (p. 184, 186).
  - 15) Rapport, F.L. and Maggs, p. 148-150 (p. 184, 186), 2002, p. 496.
  - 16) Fontaine, 2002, p. 423.
  - 17) 当時の反響・反応および後の影響については Fontaine が詳しい。
  - 18) Titmuss, [1970] 1997, *op.cit.*, p. 127-128.
  - 19) *Ibid.*, Chap. 8, p. 129-141.
  - 20) *Ibid.*, Chap. 10, p. 293-303. これには近年批判がなされている。(Mellstrom, 2008)
  - 21) *Ibid.*, p. 302-303 “Over two-fifths of all the answers in the whole sample fell into the categories altruism, reciprocity, replacement and duty. Nearly a third represented voluntary responses to personal and general appeals for blood. A further 6 per cent responded to an ‘awareness of need.’ These seven categories accounted for nearly 80 per cent of the answers, suggesting a high sense of social responsibility towards the needs of other members of society. Perhaps this is one of the outstanding impressions which emerges from the survey.” (下線筆者)
  - 22) *Ibid.*, p. 279.
  - 23) *Ibid.*, p. 140.
  - 24) *Ibid.*, p. 279.
  - 25) Steiner, 2003, p. 148.

- 26) Titmuss, *op.cit.*, p. 306.
- 27) *Ibid.*, p. 306.
- 28) “So Titmuss indicates that blood donors can feel that their donation is a response to earlier benefits, or a gift which in future might be reciprocated when they themselves are in need, or that most generally it is something they are obliged to do as part of their membership of the collectivity.” Ashworth, 2013, p. 5 ; その他 Rapport and Maggs, 2002.
- 29) Titmuss, 1968, *op.cit.*, p. 151 (p. 187).
- 30) Campbell, 2012, p. 171.
- 31) Titmuss, [1970] 1997, *op.cit.*, p. 307.
- 32) *Ibid.*, p. 292.
- 33) Steiner, *op.cit.*, p. 148.
- 34) Keown, 1997; p. 96-100.
- 35) Titmuss, *op.cit.* (altruistic toward strangers); Steiner, *op.cit.* p. 149 (relations among strangers).
- 36) Titmuss, *op.cit.* Chap. 16・17; Campbell, *op.cit.*, p. 171.

### 参考文献

- Titmuss, Richard M. *Poverty and Population*, Macmillan, 1938.
- . *Birth, Poverty and Wealth*, Hamish Hamilton Medical Books, 1943.
- . *Problems and Social Policy*, Longmans, 1950.
- . *The Social Division of Welfare*, Liverpool University Press, 1956.
- . *Essays on “the Welfare State”*, Allen and Unwin, 1958; 1963; 1976. (ティトマス・谷昌恒邦訳『福祉国家の理想と現実』東京大学出版会, 1967年)
- . *Commitment to Welfare*, Allen and Unwin, 1968; 1976. (R. M. ティトマス・三浦文夫監訳『社会福祉と社会保障 — 新しい福祉をめざして』東京大学出版会, 1971年)
- . *The Gift Relationship: from Human Blood to Social Policy*, Allen and Unwin, 1970; (Original edition with new chapters, edited by Ann Oakley and John Ashton, New Press, 1997)
- . *Social Policy: An Introduction*, Allen and Unwin, 1974. (ティトマス・三友雅夫監訳『社会福祉政策』恒星社, 1981年)
- Ashworth, Peter D. “The Gift Relationship” *Journal of Phenomenological Psychology*. Vol. 44 Issue 1, p. 1-36, 2013.
- Campbell, Alastair. V., Tan, Cecilia, Boujaoude, F. Elias. “The ethics of blood donation: Does altruism suffice?” *Biologicals* 40, p. 170-172, 2012.
- Fontaine, Philippe. “Blood, Politics, and Social Science: Richard Titmuss and the Institute of Economic Affairs, 1957-1973” *Isis*, Vol. 93, No. 3 (September 2002). p. 401-434.
- 一圓光弥 「選別主義か普遍主義か — ティトマスの社会保障論を中心に —」『社会保障』Vol. 25 No. 646, 1971.
- Keown, John. “The gift of blood in Europe: an ethical defence of EC directive 89/381” *Journal of Medical Ethics* 1997; 23 p. 96-100.
- Mauss, Marcel. “Essai sur le don: forme et raison de l’échange dans les sociétés archaïques”, *Année sociologique*, N.S., tome 1, 1923-24, p. 30-186 (in Marcel Mauss, *Sociologie et anthropologie*, Paris: Presses Universitaires de France, 1950, p. 143-279). (マルセル・モース／森山工訳『贈与論他二篇』岩波書店, 2014年, 吉田禎吾・江川純一訳『贈与論』筑摩書房 2009年)
- Mellstrom, Carl, and Johannesson, Magnus, “Crowding Out in Blood Donation: Was Titmuss Right?”

- Journal of the European Economic Association*, June 2008, 6 (4): 845-863.
- 三浦文夫「ティトマスのプロフィールと業績」『月刊福祉』全国社会福祉協議会編, 60 (3), 1977-03, 58-61, 66 頁。「リチャード・M・ティトマス — その人と業績 —」『季刊社会保障研究』Vol. 13, No. 1, 82-92 頁, 1977 年。
- 小田憲三「社会福祉におけるステイグマ問題」『川崎医療福祉学会誌』Vol. 2, No. 1, 1992.
- Rapport, F. L. and Maggs, C. J. "Titmuss and the gift relationship: altruism revisited" *Journal of Advanced Nursing* 40 (5), 2002, p. 495-503.
- 佐久間寛「交換, 所有, 生産」『マルセル・モースの世界』モース研究会, 平凡社, 2011年。
- 桜井英治『贈与の歴史学 — 儀礼と経済のあいだ —』中央公論新社, 2011年。
- Shannon, Thomas A. "The Kindness of Strangers: Organ Transplantation in a Capitalist Age" *Kennedy Institute of Ethics Journal*, Vol. 11, No. 3, Sept. 2001, p. 285-303.
- Steiner, Philippe. "Gifts of Blood and Organs: the Market and 'Fictitious' Commodities" *revue française de sociologie*, 2003/5 Vol. 44, p. 147-162.
- Welshman, John. "The Unknown Titmuss", *Journal of Social Policy*, Vol. 33, Issue 02, April 2004, p. 225-247.

